

山形県埋蔵文化財調査報告書第42集

大淵台遺跡

発掘調査報告書

1981

山形県教育委員会

おお ぶち だい

大淵台遺跡

発掘調査報告書

昭和 56 年 3 月

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した温海川治水ダム建設にかかる「大淵台遺跡」の発掘調査結果をまとめたものであります。

温海町の大半は急峻な山地と南北に沿って走る海岸からなり、その海岸線は太古より交通の要所であったことが史跡・文化財の多いことで知られております。そうした中で大淵台遺跡の発掘調査は、本県でも数少ない約7000年前の縄文時代早期中葉の集落跡であることがわかり、新潟・秋田両県の文化の交流を考えるうえで貴重な資料を得ることができました。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には、数多くの問題が山積しております。この両者の調整を行ない埋蔵文化財の保護をはかることは重要な課題であり、県教育委員会においては一層の努力を重ねてきているところであります。

このような意味において、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

終りに、調査にあって適切な御指導と多大なる御協力をいたいた関係各位に、心から感謝申し上げるものであります。

昭和56年3月

山形県教育委員会
教育長 大竹正治

例　　言

- 1 本報告書は、温海川治水ダム建設工事に伴う、大淵台遺跡の緊急発掘調査報告書である。調査は、山形県教育委員会が主体となり昭和55年7月7日～8月9日まで延24日間行なわれた。
- 2 発掘調査にあたっては、山形県土木部河川課・同温海川ダム建設事務所・温海町教育委員会などの諸関係機関の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。
- 3 調査体制は、下記の通りである。

調査主体　山形県教育委員会

調査担当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 佐々木洋治（主任調査員） 渋谷孝雄（現場主任） 中嶌 寛（調査員）

調査協力　温海町教育員会

- 4 掃図縮尺は、遺構については $\frac{1}{20}$ ・ $\frac{1}{40}$ 、遺物については $\frac{1}{2}$ を基本とし、それぞれにスケールを示した。掃図中及び文中の記号は、SK—土壤・EU—埋設土器・EP—ピット、SM—集石とし、一連番号を付け、一括土器についてはRPの一連番号を付けた。また各遺構の覆土はFによって表わした。

- 5 本報告の作成は、渋谷孝雄・佐藤正俊が担当し、執筆した。掃図・図版作成については、津留房子・黒金佳子・枝松美保子、土器復元については鏡 克子・奥山厚子・太田八重子、土器拓本については池田洋子、佐藤隆子がこれを補助した。また石器の実測・トレースにあたっては福島日出海（立正大学学生）君の協力を得た。

本書の編集は、名和達朗・渋谷孝雄が担当し、全体については佐々木洋治が総括した。

目 次

I 調査の経緯		
1 調査に至る経過	1	1) 土 壤.....7
2 調査の経過	1	2) 埋設土器、ビット群.....9
II 遺跡の概観		3) 集 石.....10
1 遺跡の立地と環境	3	2 遺 物.....11
2 遺跡の層序	4	1) 土 器.....11
3 遺構と遺物の分布	5	2) 石 器.....20
III 遺構と遺物		IV まとめ
1 遺 構	7	1 遺跡の性格について.....24
		2 遺物について.....24

挿図目次

第1図 遺跡全体図	2	図版 1 発掘前中央区全景
第2図 遺跡位置図	3	調査風景 R P 1 出土状況
第3図 基本層序	4	図版 2 S K 3
第4図 遺構分布図	5	図版 3 S K 8 S K 7
第5図 遺物分布図	6	図版 4 S K 6・9 E U 5
第6図 土塊集成図	8	図版 5 S M10
第7図 埋設土器平面・断面図	9	図版 6 中央区南部遺構群
第8図 集石平面・横断・縦断図	10	図版 7 第I群土器
第9図 土器拓影図(1)	13	図版 8 第I群土器 第II群土器
第10図 土器拓影図(2)	15	図版 9 第II群土器
第11図 土器拓影図(3)	16	図版10 完形・一括土器(1)
第12図 土器拓影図(4)	17	図版11 完形・一括土器(2)
第13図 土器拓影図(5)	18	図版12 石器(1) 石器(2) 石器(3)
第14図 土器実測図	19	
第15図 石器実測図(1)	21	
第16図 石器実測図(2)	23	

図版目次

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

三方倉山に源を発し、温海川、一霞、湯温海の各集落を経て、浜温海で日本海に注ぐ温海川は、豪雨のたびに、温海温泉などの下流域に被害をもたらしたことから、治水ダムの建設が計画され、昭和59年度完成をめざして工事が開始された。ダム本体は温海町大字一霞字布滝地内に建設されることになり、昭和56年度に着工の運びとなった。形式は堤高58m、堤頂長185mの重力式コンクリートダムで、建設に伴う骨材製造の仮設備が、本体の下流約200mにある平坦地、通称大瀬台に設置されることになった。ところが、この台地は、未登録ではあったが、地元民の間では土器・石器の出土する遺跡として認識されていた。

昭和54年9月の山形県教育庁文化課による、55年度各種事業事情聴取にもとづき、同11月に分布・試掘調査を行った結果、縄文時代の集落跡であることが確認された。山形県教育庁文化課では、県土木部河川課・同温海川ダム建設事務所・温海町教育委員会と、対応について協議した結果、事前の緊急調査を行うことで合意をみた。

2 調査の経過

発掘調査は昭和55年7月7日から8月9日まで、延24日間実施した。遺跡面積は東西約70m×南北約120m、約8,400m²であるが、すでに土砂に埋れたX軸20以東、Y軸40以北の地域と、土砂運搬用の取付道路を除外した地域を対象として調査を進めた。グリッドはY軸をほぼ南北方向にとり、大きさ3×3mである。調査経過の概略は下記の通りである。

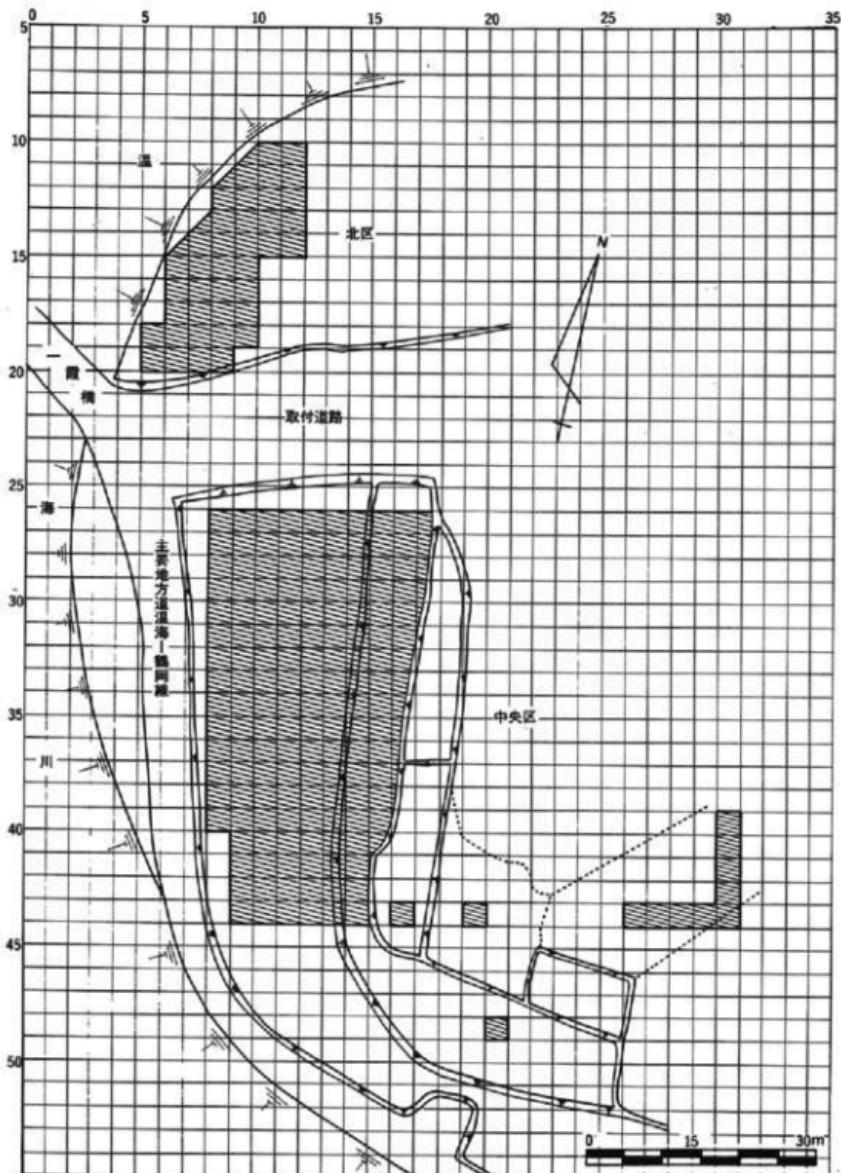
7月7日～11日 グリッド設定。X軸8・10・30列、Y軸15・30・35・43列をトレント掘り。取付道路を挟んで北側（以下北区と略す）と南側の最下段（以下中央区と略す）で遺物の出土がみられたが、Y軸43列、X軸30列は遺物の出土もなく、表土下は砂利である。

7月14日～18日 拡張作業。北区と、X軸8・9列は手掘りで、中央区X軸11列以東はバックホーを用いる。全体的に遺物の出土量は少なく、縄文時代の遺構は検出できず。

7月22日～25日 遺構検出作業。中央区で土壙2基検出（SK3・4）。北区で明治頃の吊り橋跡を確認（SX1・2）、9-28区で一括土器（RP1）出土。

7月28日～8月1日 遺構検出・精査作業。中央区で土壙5基（SK6・7・8・9）、集石（SM10）、ビット群を検出。一部精査に入る。北区では遺構検出できず。

8月4日～9日 遺構精査・平面実測・現地説明会（6日）。各遺構の精査・層位断面図の作成、写真撮影。中央区の平面図作成、写真撮影。現地説明会には49名参加。9日に作業を終了する。



第1図 遺跡全体図

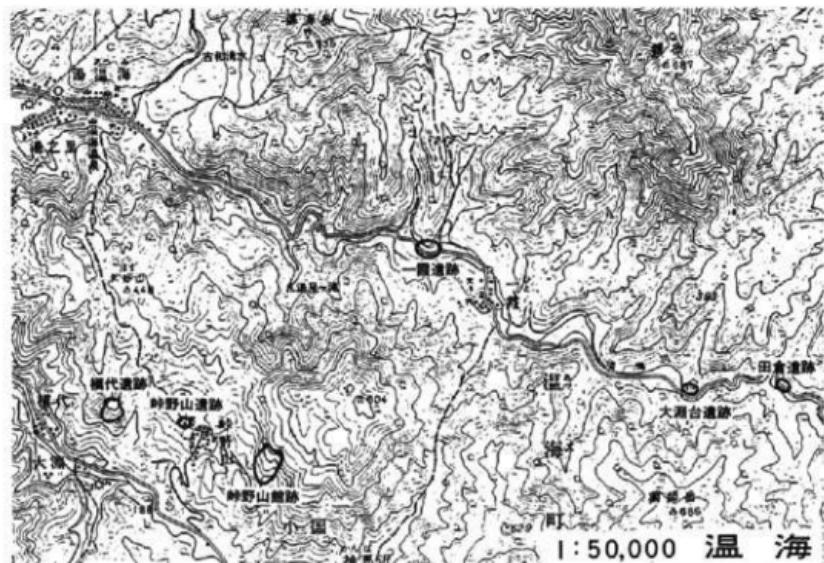
II 遺跡の概観

1 遺跡の立地と環境（第2図）

東田川郡朝日村との境界にあたる三方倉山に源を発する温海川は、温海川の集落のある小盆地で北俣川、南俣川と合流し、再び山間部に入り、所々で小台地を形成しながら、一霞、湯温海などの集落を経て、浜温海で日本海に注いでいる。遺跡は一霞の上流約2kmにある東西約80m、南北約130mの小台地となっているゆるやかな山ろく斜面（通称“大淵台”）に立地し、標高は110～120mをはかり、現河床からの比高は約8mである。

“大淵台”は、日清戦争の頃に開田され、その際の切土・盛土の影響を受けて、現在では4つの段差をもつ平坦地からなっている。最近では水田のほか、畑地や杉の苗圃として利用され、東方の斜面では、焼畑農耕による“温海カブ”的栽培も行なわれている。

温海川をはさむ対岸、薬師岳をはじめとする南側一帯の山地は、山菜の豊庫として知られ、また遺跡の上流約300mには通称“イヨ止め”。という地名が残っており、昭和のはじめまでは、温海川も鮭の遡上する川であったという。温海川流域には、スキー場一帯に縄文時代中期の一霞遺跡、本遺跡の上流約1kmには縄文時代晚期の田倉遺跡が登録されている。

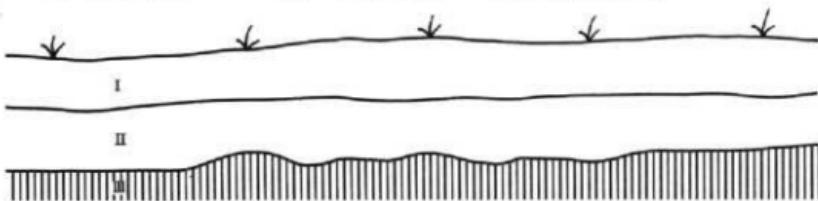


第2図 遺跡位置図

2 遺跡の層序（第3図）

遺跡は4つの段差をもつ平坦地からなっている。このうち、下から3段目、4段目は耕作土約30cm以下は砂礫層となり遺物の出土もなく、拡張・精査区から除外した。また2段目も16—43グリッド以外は遺物の出土もなく、精査は行っていない。精査を行った最下段は傾斜もなく以下のようないくつかの基本層序となっている。

- | | |
|---------------|--------------------------------|
| I層 黒褐色シルト | 耕作土で15~20cmの層厚をもち下部に酸化鉄の付着がある。 |
| II層 暗褐色シルト | 遺物を含む層で部分的に黄褐色シルトが混入する。20cm前後。 |
| III層 黄褐色砂質シルト | 地山であり、遺構はこの上面で検出された。 |

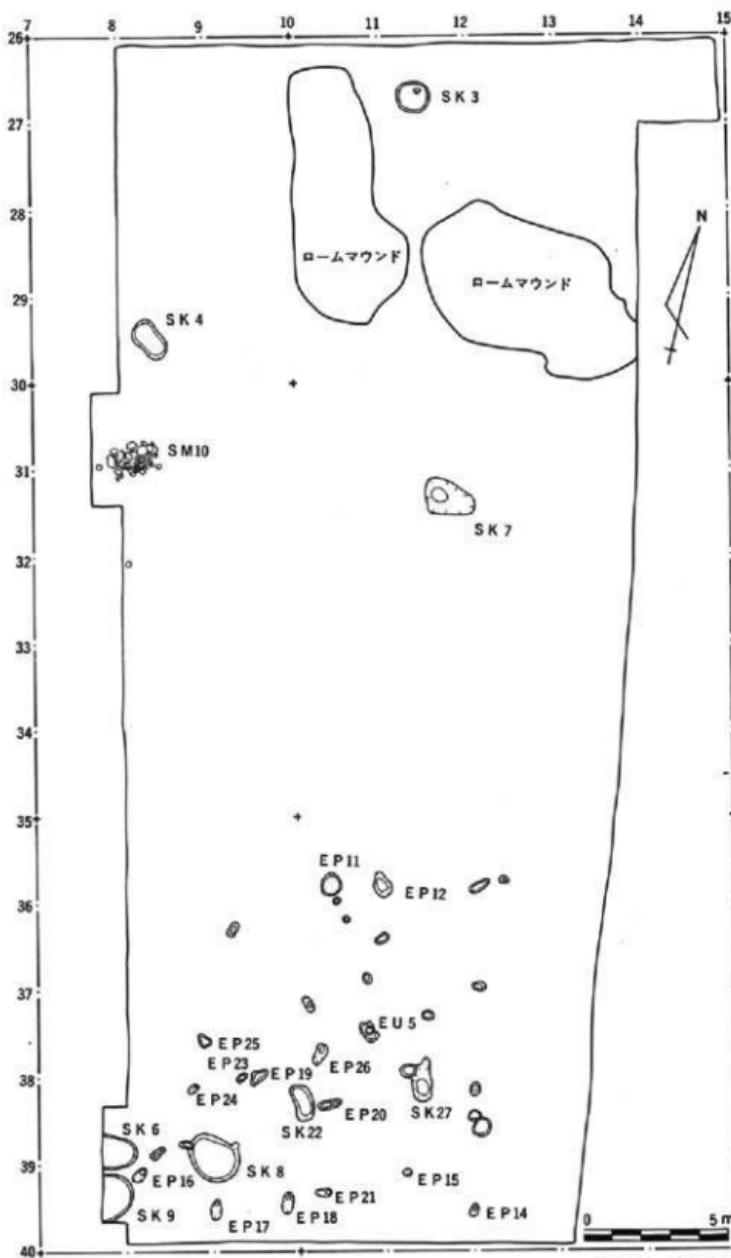


第3図 基本層序（9—30区東壁）

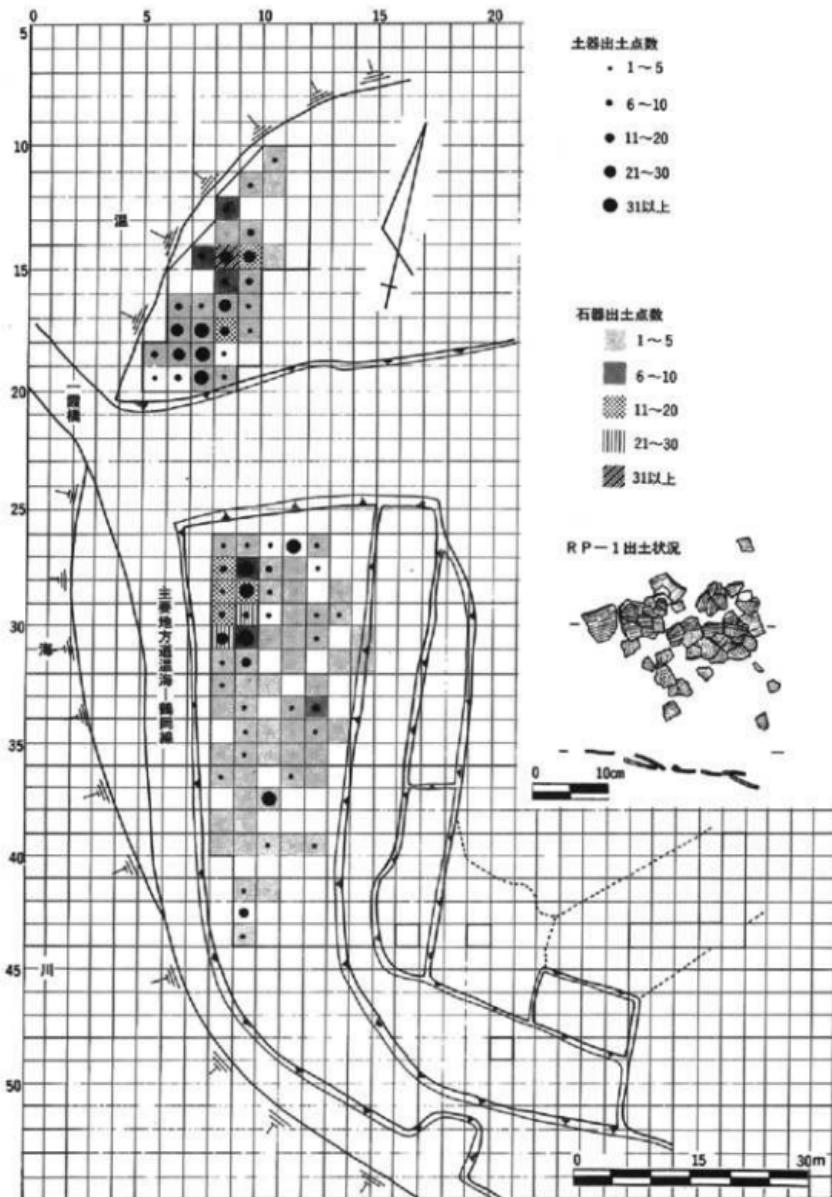
3 遺構と遺物の分布（第4～5図）

本遺跡では土壌・集石・ピットの遺構が検出され、土器・石器など約1000点の遺物の出土をみた。北区では、川に接する10—11区を中心に明治期の吊り橋に関連する遺構を2基検出しただけで、縄文時代の遺構は確認されなかった。中央区ではY軸26~31に、SK3・4・7の各土壌と、SM10の集石が散漫に分布し、これらに囲まれる地域に、自然營力によるとと思われるロームマウンドが2ヶ所で検出された。このロームマウンドはいずれも長軸が9m前後の大きなもので、黒色土は確認面から約80cm落ち込み、最下底から土器片が出土したことから、縄文時代以降の所産とみられる。Y軸32~34に遺構ではなく、精査区の南西にあたるY軸35~39に、SK5・6・8・9・22・27の各土壌とピット群が密集している。

遺物は石器と土器からなり、両者とも同じような分布状況を示している。散漫な地域、密集する地域に分けられ、少なくとも4ヶ所の密集地域を認定することができる。遺構の検出できなかった北区で、8~9—13~15区、6~8—16~19区の2ヶ所、中央区の北部にあたる8~9—27~28区と、SK4、SM10を検出した8~9—29~30区の2ヶ所である。全体的に川に近いX軸6~8に沿った遺跡の北西部での出土量が多く、東側、南側にゆくに従い出土量が少なくなる。遺構密集地である7~12—35~39区ではSK5の埋設土器を除けばいずれも5点以下の出土量で、遺構と遺物の分布域が異っていることが指摘できる。



第4図 遺構分布図



第5図 遺物分布図

III 遺構と遺物

1 遺構

1) 土壙（第6図）

8基検出され、確認面はいずれも地山であるIII層上面である。以下、各々について要点を記す。

SK 3（第6図 図版2）

中央区の北端11-26区で検出された円形プランの土壙である。直径110cmをはかる。深さは30cm、底面はほぼ水平で、一部袋状になっている。覆土は3層からなり、それぞれの層に同一個体の土器片が含まれていることから、割合短時間のうちに埋没したものと考えられる。土器は底部平底の無文土器で、接合はしなかったものの同一個体と考えられる土器片1点が北区6-15区から出土している（第15図2）

SK 4（第6図）

8-29区で検出した。プランは不整橢円形で直軸約150cm、短軸約80cmをはかる。深さは約20cmと浅く一部ピット状に深くなっている。覆土は4層からなるが、1層から、土器片4点と、竈状石器の未完成品が1点出土している。土器は口縁部破片（第13図5）1点と体部破片（第9図12、第11図7他1点）3点で、最も新しいと考えられる縄文時代前期初頭に埋設したものと思われる。

SK 6（第6図 図版4）

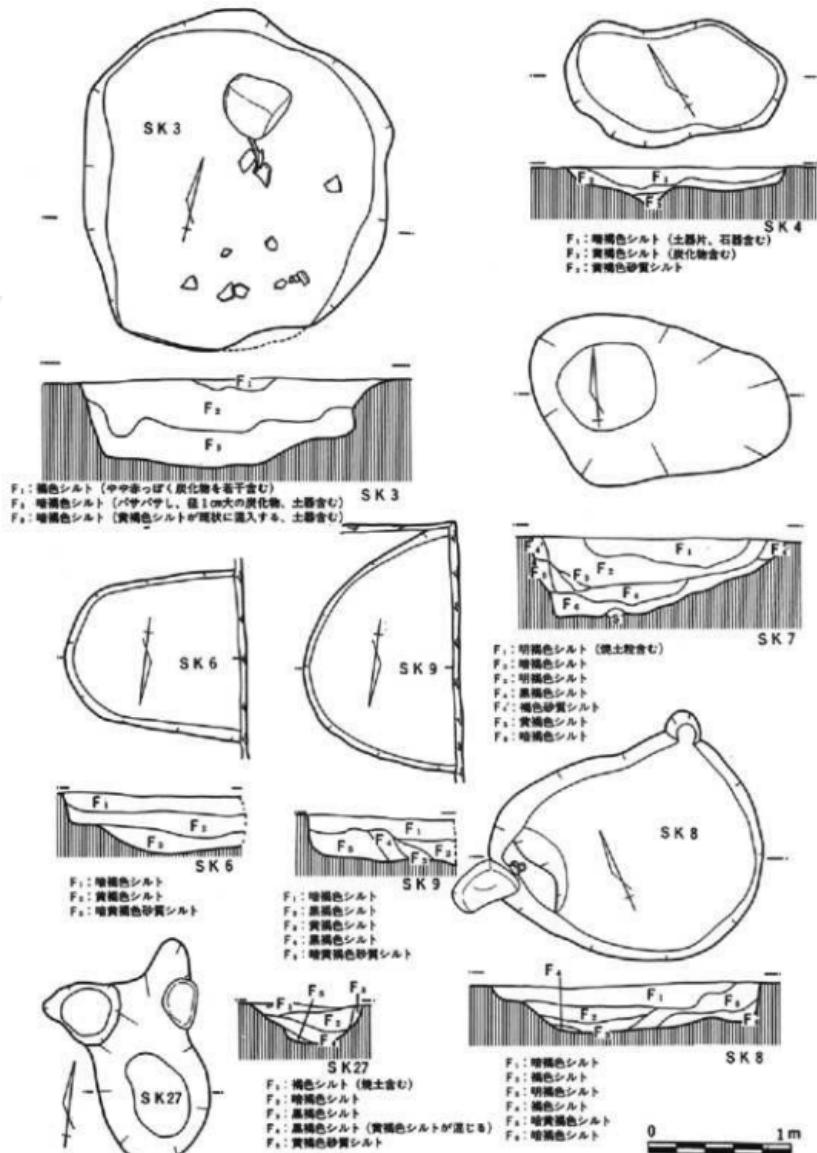
7~8-38~39区で検出した土壙で、SK 9と同様西半は県道拡張の際に破壊されている。プランは長楕円形で長軸は140cm以上、短軸は約120cmと大形である。深さは40cmに達し、覆土は3層からなるが遺物の出土はない。

SK 7（第6図 図版3）

11~12-31で検出された土壙である。プランは不整橢円形、長軸180cm、短軸120cmをはかり底面は小さく円形に近い。西部で急斜なたちあがりをみせ深さは55cmをはかる。覆土は7層を数え、1層には焼土粒も含まれるが、遺物の出土はない。

SK 8（第6図 図版3）

8~9-38~39区で検出した不整円形の土壙で大きさは190×170cmをはかる。急斜なたちあがりを示すが、西部で段がみられ、この部分に小礫が3個検出された。また壁にかかって大きな礫が落ち込んでいる。深さは30cm内外で、底面はほぼ水平である。覆土は6層を数えるが遺物の出土はない。



第6図 土壌集成図
SK 3は $\frac{1}{20}$ 他は $\frac{1}{40}$

S K 9 (第6図 図版4)

7~8-39区で検出された円形プランの大形土壙で、西半は道路で切られている。直径170cm以上で、急斜なたちあがりをみせ、底面はほぼ水平である。覆土は5層確認されたが遺物の出土はない。

S K 27 (第6図)

11-37~38区で検出された土壙で北西部は浅いピットに切られ、東部には擾乱がみられる。プランは橢円形で長軸130cm、短軸80cmをはかる。深さは30cmで覆土は5層からなり、1層から剝片1点の出土をみている。

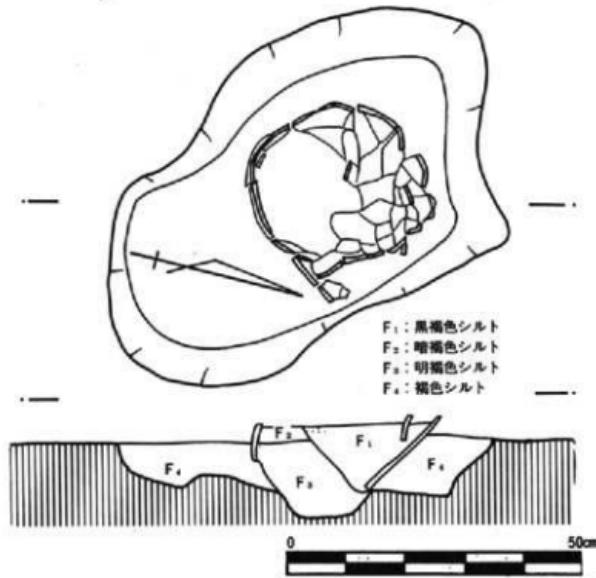
ほかに、130cm×60cmの橢円形プランで深さが30cmの土壙 (S K22) が検出されている。

2) 埋設土器 (第7図 図版4)、ピット群 (第4図 図版6)

10-37区で検出した。掘り方は不整橢円形のプランをもち、長軸約80cm、短軸約50cmをはかる。深さは15~20cmで、土器の内部では30cmに達する。覆土は掘り方は単一層、土器内部で3層に分かれれる。土器は掘り方のほぼ中央にあり、北方向からの圧力を受けて下半は南方にズレをみせている。残存率は低く完全な復元はできなかったが、堆積状況から土壙内に意図的に配置した埋設土器と判断した。土器の所属時期は縄文時代前期初頭である。

中央区南部の遺構

密集地で15基のピットを登録した。このうちE P16~21の6基は、長軸70cm内外、短軸30cm内外の長軸橢円形プランで、段をもち、一方に片寄って深くなる。覆土はいずれも黒褐色砂質シルトの単一層で40~60cmと深く、SK 8付近を中心とする柱穴群の可能性を否定できない。

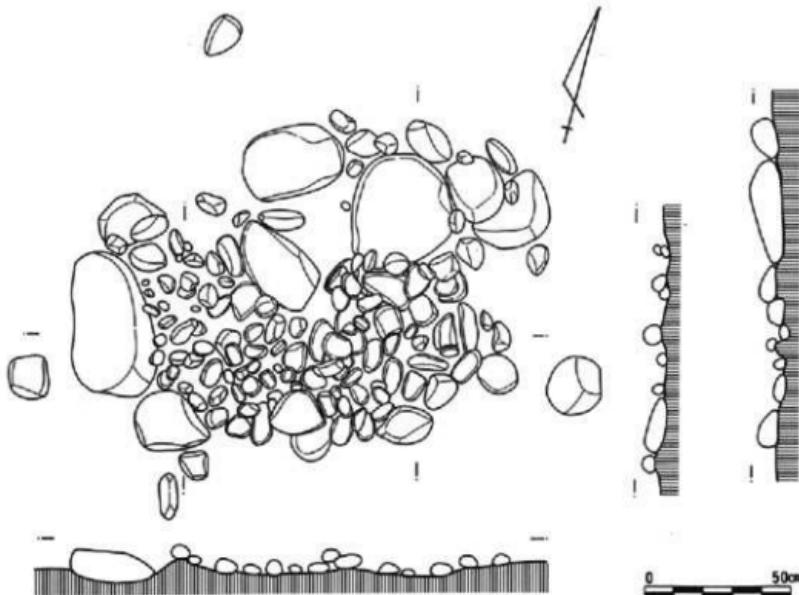


第7図 埋設土器平面・断面図

3) 集石(SM10) (第8図 図版5)

7~8-30~31区でII層下部で確認された。III層上面に載っており一部はIII層にくい込んでいる。大小140個あまりの河原石で構成され長軸195cm、短軸120cmをはかる。長軸方向はN-70°-Eである。河原石の大きさは最大のもので50×30×10cm、最小で径3cmと幅が大きく、大形の石を外側に配置して大枠をつくる傾向がみられる。中央にある一群は浮いているものが多く、積み重ねたというよりは、放り込まれたという印象を受ける。石を外した後、下部施設の有無について精査したが、土壌、ピットなどの付属施設は検出されなかった。

集石内部からの遺物の検出はなかったが、8-30区II層から土器片26点、石匙（第15図5）、剝片22点が出土している。土器片は口縁部資料3点、体部資料22点、底部資料1点からなり、表裏に縄文の付されたものが4点（第10図4 他）ある。22点は表面にのみ縄文が付されており、底部資料もこれに属し、丸底状を呈する（第13図18）。これらの土器は、縄文時代早期末葉から前期初頭の所産と考えられ、集石の所属時期もこの幅の中で考えられる。なお、8-30区II層から出土した口縁部破片（第13図7）は、SK4出土の口縁部破片（第13図7）と接合し、同一個体である表裏縄文土器もある（第11図6、7）。



第8図 集石平面・横断縦断図

2 遺物

1) 土器

出土した土器片は、総数548点である。内訳は時期が識別できる土器片が361点で、不明のものが187点を数える。今回は遺構及び包含層から出土した土器を一括し、挿図中に明記したものである。土器は、第Ⅰ群土器を縄文時代早期後半、第Ⅱ群土器を縄文時代前期初頭として大別し、それぞれ表出された技法および文様別に類別して、完形土器は一群として記述する。なお、縄文の原体については、施文された方向で書き表わすことにした。

(a) 土器片の分類（第9～13図 図版7～9）

第Ⅰ群土器（第9～11図）

大半が、深鉢形の器形になり底部が丸底となる。器面全体に縄文あるいは表裏縄文、また貝殻条痕を施している。胎土に、纖維を含む土器もある。

a類（第9図1・2）

いずれも口縁部の破片である。1は口縁部が外反し、口唇直下より3本の平行な沈線が施され、焼成もよく器面の整形もよく、胎土には砂礫粒が含まれる。2は口唇が若干外反し、貝殻の先端によって押圧し、胎土には纖維が混入し砂礫粒も含まれる。

b類（第9図13～18）

器面全体に斜状方向に細い単節縄文がみられ、13では口唇部から裏側に施されている。器厚も0.8～1.2cmと厚く、胎土には石英粒・砂礫粒が多く含まれ、焼成も良い。16には若干纖維が含まれる。棒状工具の先端による刺突が平行・斜状に施され、13では口唇直下、14～16では胴中半部に、17・18では胴下半部に帯状に施されている。

c類（第9図19～27）

器面全体に貝殻によって条痕を斜状に施し、24・27は裏側にみられる。1は口唇が外反し、表には縄文が施され、裏側には口唇直下に条痕がみられる。胎土には石英粒や砂礫粒が含まれ、色調は褐色・暗褐色を呈している。1・22・24の胎土に若干纖維が混じる。

d類（第10図1～14・第11図1～7）

器面全体の表裏に縄文が施されている。口縁部が外反するものは2～4・7（第10図）で、1・5・6（第10図）は口縁部が外反し口唇裏側が平滑になっており、これらはいずれも口唇裏側の直下より縄文が施されている。口縁部付近や胴上半部で羽状を示すものは3・4・7～13（第10図）と1～5（第11図）があり、横位と斜状に施し羽状となり、原体はRLである。3～4本の0段多条のRL・LRを施すものとして3・7・8・11～13（第10図）と1～5（第11図）がある。9（第10図）と6（第11図）は胎土に若干纖維が含まれている。

e類（第9図3～12・第11図13～19）

器面全体に原体R LやL Rの繩文を施している。ほとんど繩文が細かくなっている。斜状方向から施文し、10（第9図）や17.18（第11図）は左・右斜状方向から施文している。胎土には砂礫粒が多く含まれ、纖維は混入されていない。

f類（第11図8～12）

無文土器の一群である。口唇部が若干肥厚し丸味があり、外反するもの8と若干内湾するもの9がある。10～12は胴下半部付近である。胎土には石英粒が多く含まれ、焼成も良く固く、よく整形されている。

第二群土器（第12・13図）

土器の胎土には、その大半に纖維が含まれている。沈線・撚糸の圧痕・絡条体圧痕・羽状繩文などを施している。

a類（第12図1～5）

撚糸の圧痕によって文様を描出している。1・2は口縁部破片で渦巻状になり、胎土には纖維を含んでいる。3～5は二条の平行な撚糸圧痕がみられ、細い棒状工具で針状に押し、その直下に羽状繩文を施している。胎土には纖維がみられず、焼成もよい。

b類（第12図6～14）

半截竹管やヘラ状工具先端を使用し文様を描出している。5～8は平行な沈線によって文様が区画され、区画された部分は丁寧に調整されている。9～14は半截竹管によって斜状ないし、綾杉状に施文されている。胎土は砂礫粒が多量に含まれ、焼成は固い。

c類（第12図15～23）

半截竹管による爪形文や棒状工具の先端で刺突文などがみられる。15～18は口唇部や口唇直下に爪形が施され、地文が絡条体による押捺がみられる。19・20は胴部に爪形文が施され、20では平行沈線の間に施されている。21～23は不規則的に斜状方向から刺突されている。いずれも胎土に若干纖維が含まれる。

d類（第13図1～4）

ヘラ状工具の先端を利用して、鋸齒状や綾杉状に施している。胎土には砂粒子や纖維が多く含まれ、焼成がやや軟らかい。

e類（第13図5～20）

ループ文や絡条体の押捺を施し、体部は羽状繩文となる。5・7・11～12・14・15・18はループ文が施され、胎土に纖維を含む。18は丸底の底部資料である。他は絡条体の押捺によるもので、ループ文と組み合わさるものとして16・20があり、纖維は含まれない。

f類（第13図21～33）

羽状線文や斜縞文が施されている。21は異条斜縞文が口唇部直下より施され、口唇は丸く肥厚し若干内湾している。29は綾絡文となっている。ほとんどに纖維がわずかながら含まれている。

(b) 穹形土器（第15図1～4 図版10～11）

I c類に共通する土器〔RP1・9-28区出土〕（第15図2 図版10）

器形は深鉢形を呈し、底部が欠損しているが底辺部からみて丸底となり、胴中半部にやや脹らみがあり、口唇は平滑でやや外反している。現存する高さは27.5cm・口径に最大径をもち29.3cmで、器厚0.5～0.8cmを計る。文様は口唇部から頸部付近までみられ、口唇直下と頸部付近の2本の平行沈線により区画され、区画された中には一本の沈線が走り、矢羽状に斜方向の沈線が施されている。口唇部には刻目がみられる。地文は原体がRLになる斜状方向に、口唇直下から底辺部まで器面全体に縞文が施されている。器面裏側には口唇直下より底辺部まで貝殻条痕が施されている。胎土は、石英粒や砂粒が多く含まれ、若干纖維も混入されている。色調は胴上半部が暗褐色あるいは褐色になり、胴下半では明褐色の色調である。焼成は良い。

I f類に共通する土器〔SK3出土〕（第15図1 図版10）

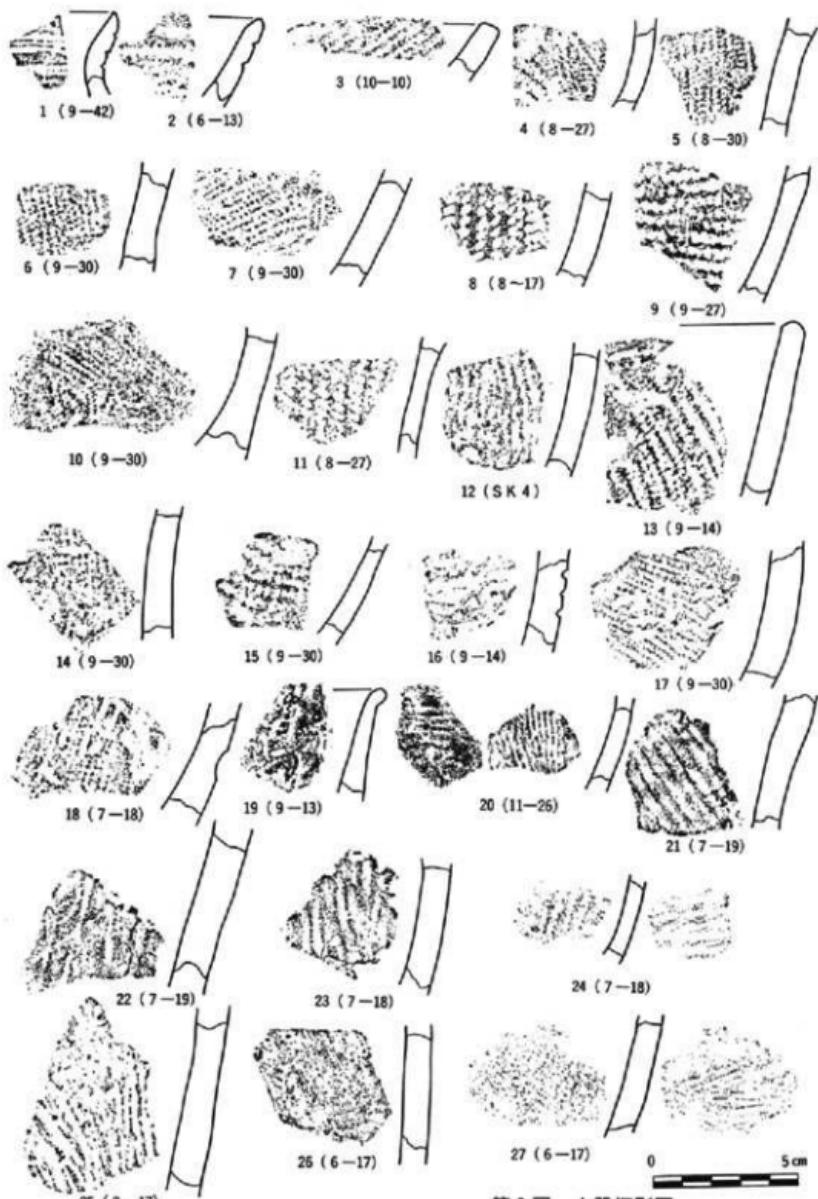
器形は深鉢形を呈するとみられる無文土器で、口唇部が平滑でやや外反し、底部が張り出す平底である。推定器高22.8cm・推定口径26.0cm・底部径8.2cmである。器面表・裏側は丁寧に調整されている。器厚0.5～0.7cmである。胎土には石英粒や砂礫粒が混じり、焼成も良い。

II a・c・e類に共通する土器〔EU5出土〕（第15図3 図版11）

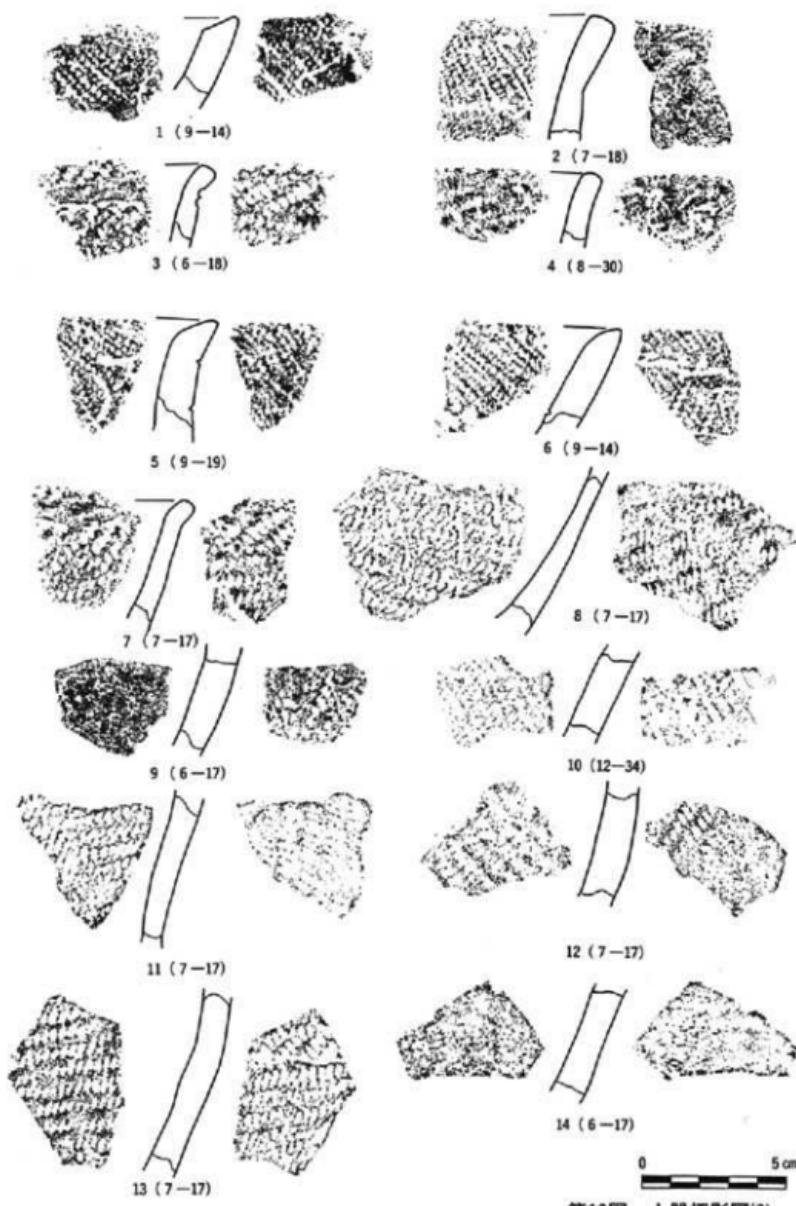
器形は深鉢形を呈するとみられ、胴中半から下半部にかけの一括土器である。地文はLRの原体で無節縞文となり、1.5～3cmの間隔で帯状に縞条体の押捺が施されている。胴下半部には半截竹管による爪形が斜状方向から刺突されている。胎土には砂粒子が多く含まれ、部分的に纖維がブロック状に混入されている。器壁は0.4～0.6cmである。器面裏側はヘラ状の先端による整形が横位に施され、擦痕としてみられる。

II c・e類に共通する土器〔RP4・6～7-18～19区出土〕（図版11下）

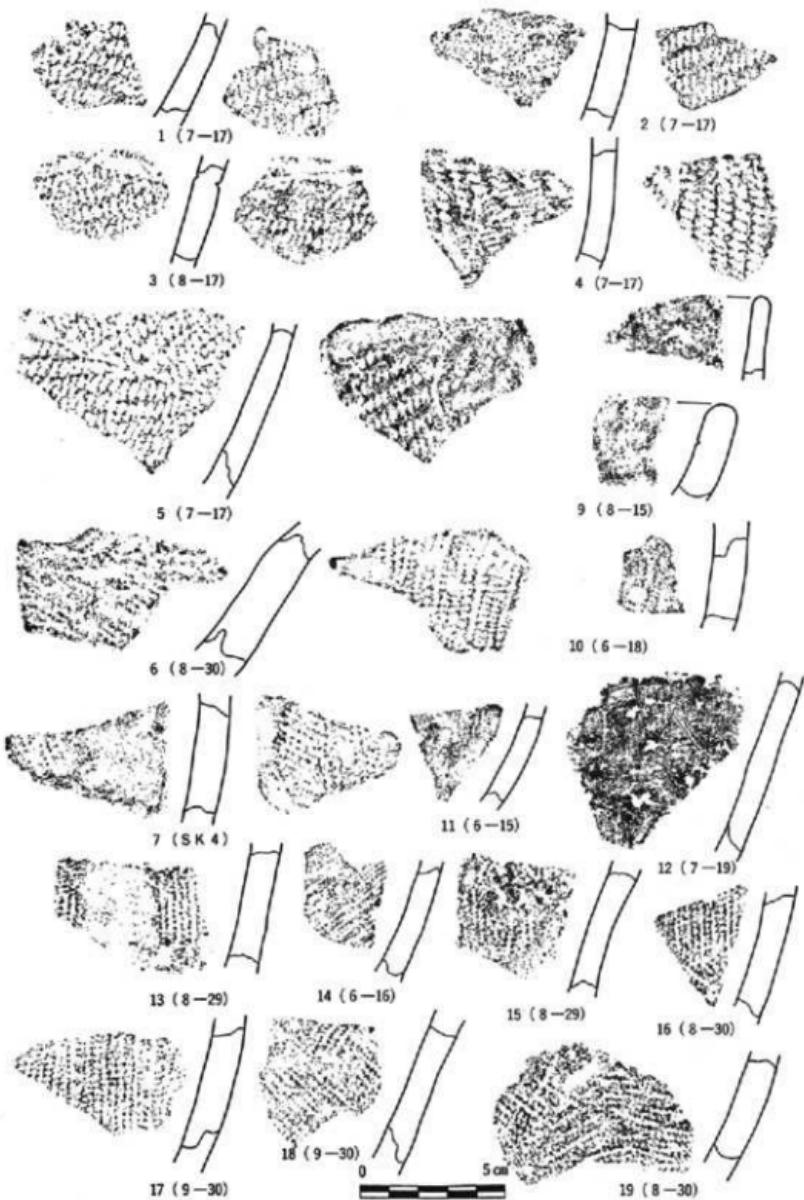
器形は口縁がやや大きく開く深鉢形土器とみられ、口唇部が若干内湾している。口唇部から半截竹管による爪形が2～3本帯状に施されている。地文は器面全体に縞条体の押捺が施されている。器面裏側は良く調整されている。胎土には砂礫粒が多く含まれており、纖維は混入されていない。器面表側はザラザラとしている。器壁の厚さは0.6～0.9cmである。



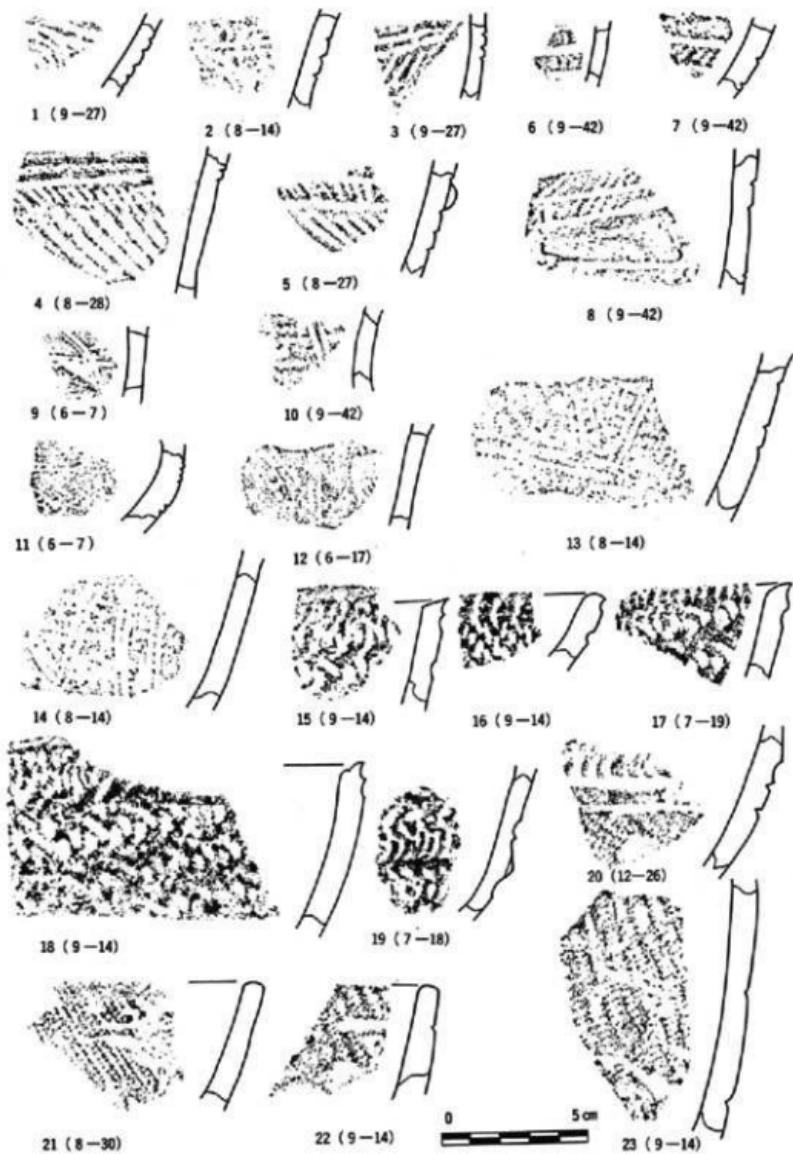
第9図 土器拓影図
I群 a類～c類・II類



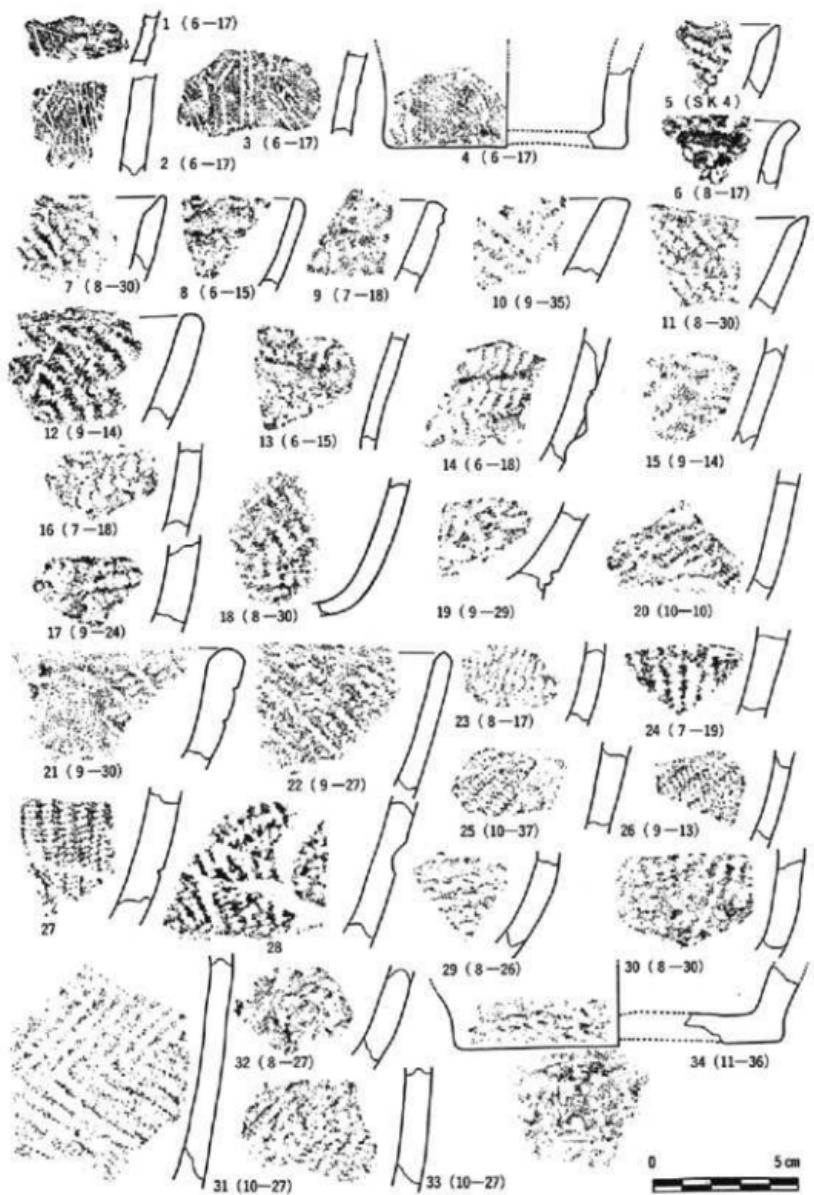
第10図 土器拓影図(2)
I群 d類



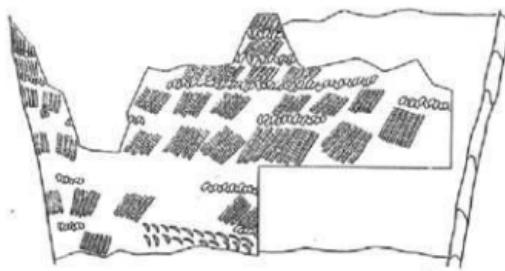
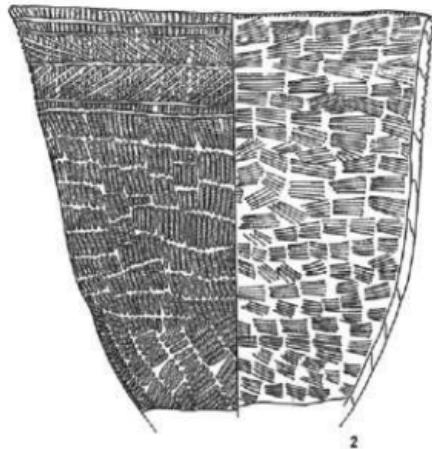
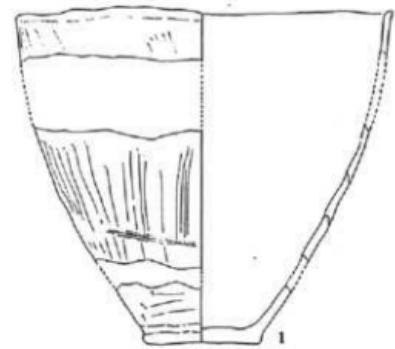
第11図 土器拓影図(3)
I群 d類~f類



第12図 土器拓影図 (4)
II群a～c類



第13図 土器拓影図(5)
II群d期～f期



0 10cm

第14図 土器実測図

2) 石器 (第15~16図 図版12、巻末表・グラフ)

本遺跡から出土した石器は総計402点で、その内訳はいわゆるトゥールが70点、石核 6 点、剝片 326 点である。トゥールには石鎌・石匙・範状石器などの打製石器と磨製石器である磨製石斧・礫石器である石皿があるが、後二者は各 1 点と少ない。打製石器の石材は数点の玉髓質を除けば硬質頁岩であり、それも木目の粗いザラザラとしたものが多く、風化によって剥離面の境が判然としなくなったものもある。打製石器は両面に調整加工が及んで判断の不可能な数点の範状石器を除いてすべて剝片を素材としている。剝片は製品である各器種の素材となり得るか否かによって次の種類に分けられる。I 類：長さ 75mm、幅 35mm、厚さ 13mm 以上。すべての石器の素材。II 類：長さ 50mm、幅 30mm、厚さ 10mm 以上。範状石器 II 類、石匙を除く素材。III 類：長さ 33mm、幅 30mm、厚さ 8mm 以上。II 類の素材から範状石器 I 類を除いたもの。IV 類：長さ 25mm、幅 17mm、厚さ 3mm 以上。III 類の素材から、スクレーパーを除いたもの。V 類：IV 類より小さなもの。石器素材となり得ない。各種の出土数は巻末の表に示したが、IV 類は 58% に達し、石器素材になり得る剝片は少ない。

以下トゥールについて各器種ごとに記述するが、計測値は巻末に一括提示した。

石 鎌 (第15図 1~3 図版12上段)

3 点とも無茎の石鎌である。1 は二等辺三角形を呈し両側縁とも直線的で浅い抉りをもつ。2 は先端が欠損し、3 は中央部で折損するが、両側縁がやや湾曲し、最大幅が脚部と尖頭部の境よりやや上方にある同形態の石鎌である。

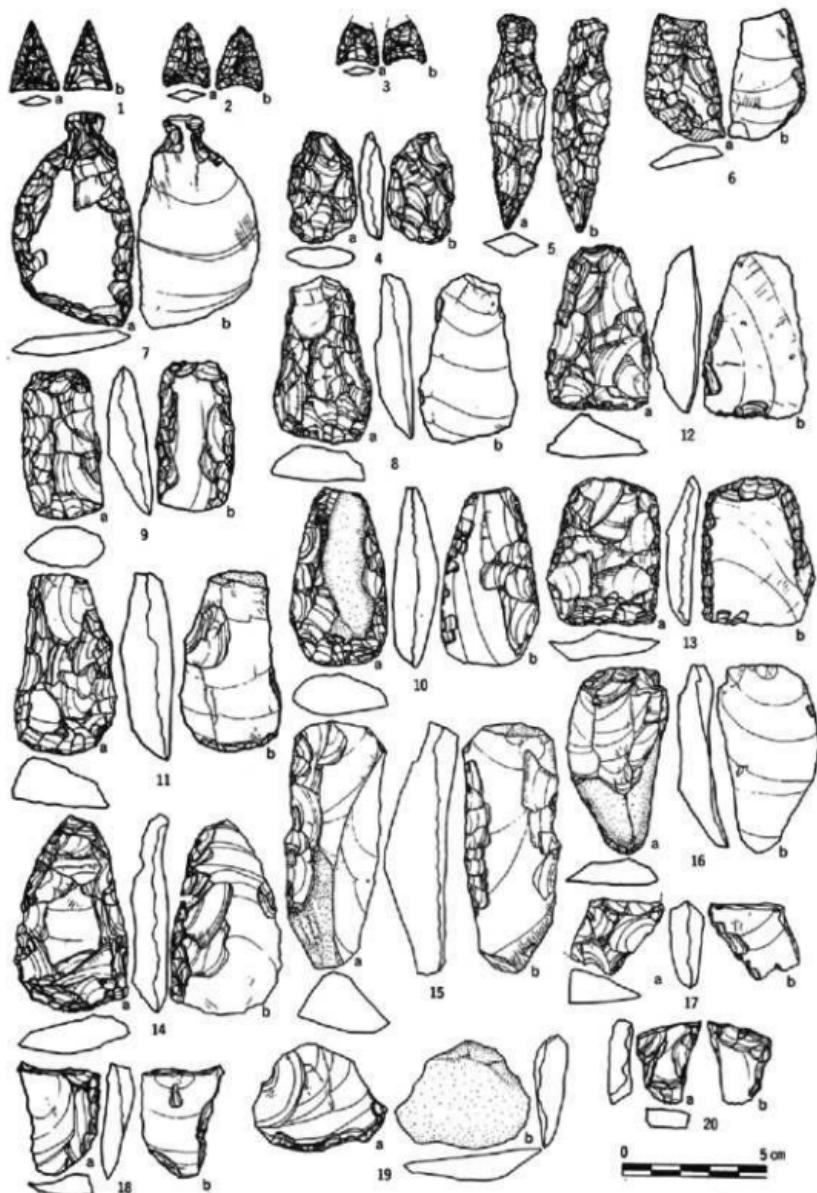
石 匙 (第15図 5~7、図版12上段)

3 点の出土をみたがそれぞれ異った形態をもつ。1 は調整加工が全面に及び両面加工の石匙で錯向剥離によって先端部を銳利に仕上げている。2 は b 面右側に打面調整剥離（註 1）をもち両側縁辺に微細な剥離痕がある。3 は縦長剝片の基部をつまみとして全周に調整加工を施している。a 面右側中央部に光沢があり、剥離面の境は丸味を帯びている。

範状石器 (第15図 8~16 (I 群)、第16図 1~8 (II 群) 図版12中段、下段)

未成品や破損品を含め 26 点の出土があり、これらは長さで I (70mm 以下)、II (70mm 以上)、刃部加工で a (フルーティングあり)、b (フルーティングなし)、側縁加工で 1 (片面加工)、2 (両面加工)、3 (両面加工)、4 (周辺加工) に分けられ、それぞれの属性の組みあわせからいくつかの類型に細分することができる。なお、巻末の計測表中の縦長、横長は素材となった剝片の、直、弧は刃先の形態を示している。

第15図 8 は I a₁ 類、9~11 は I a₂ 類に属する。8・11 は縦長剝片を、9・10 は横長剝片を素材とし、いずれもフルーティング様の剥離によって弧状の刃部を形成している。12 は I b₁ 類、13・14 は I b₂ 類に属し、刃部は一次剥離面の残る例 (12) と、通常の剥離によっ



第15図 石器実測図（1）

て形成される例(13・14)があり、刃角はI a類の55°～65°に対し40°～50°とやや鋭角になる。第16図1はII a₁類、2はII a₂類に属し、同一母岩による表皮のついた厚手の横長剝片を素材としている。両者とも見事なフルーティング様剝離によって刃部が形成されており、刃角は共に60°をはかる。3はII b₂類、4はII b₃類であり、4は刃部未成と考えられる。6～8はいずれも周辺加工で側縁を調整したII b₁類で、6・7は直線状の、8は弧状の刃部をもつ。以上の資料の長幅関係を巻末のグラフでみると各類型ごとに一定の分布域をもつことがわかる。

第15図15はI類の第16図5はII類の未成品、折損品と考えられ、I類の未成品の一部は図版12中段下右に3点、II類折損品の一部は同図版下段上右側に示した。

スクレーパー(第15図16～19 図版12上段)

剝片に連続する二次加工を施すことによって刃部を形成する石器をスクレーパーとした。これらは素材となった剝片によりI(縦長)、II(横長)、加工部位によって末端部(a)、側縁(b)、刃部加工の方法で通常(1)、鋸歯縁(2)に分けられ、その組みあわせから数類型に組分けでき、その結果は巻末計測表内に示した。16はI a₁類、17はI a₂類、18はI b₁類、19はII a₁類に属する。

折断調整石器(第15図20 図版12上段)

剝片を折断して、二次加工を施した石器で阿子島香によって注目された(註2)。3点の出土があり、いずれも素材の折断後に、刃部に二次加工を施している。外形によって台形(I類)、三角形(II類)に分けられる。19はI類に属し、三辺がほぼ直角に立ちあがるように調整され、刃角は43°をはかる。

加工痕ある剝片

剝片の縁辺にわずかな二次加工をもつ石器で11点の出土がある。その加工部位等は巻末計測表中に記した。

剝離痕ある剝片(図版12上段下左2)

剝片の縁辺に連続する微細な剝離痕をもつ石器で、使用による「刃こぼれ」によるものと、他の原因によって偶発的にいたものがあると考えられるが、その判定は困難である。

小形両面加工石器(第15図4 図版12上段)

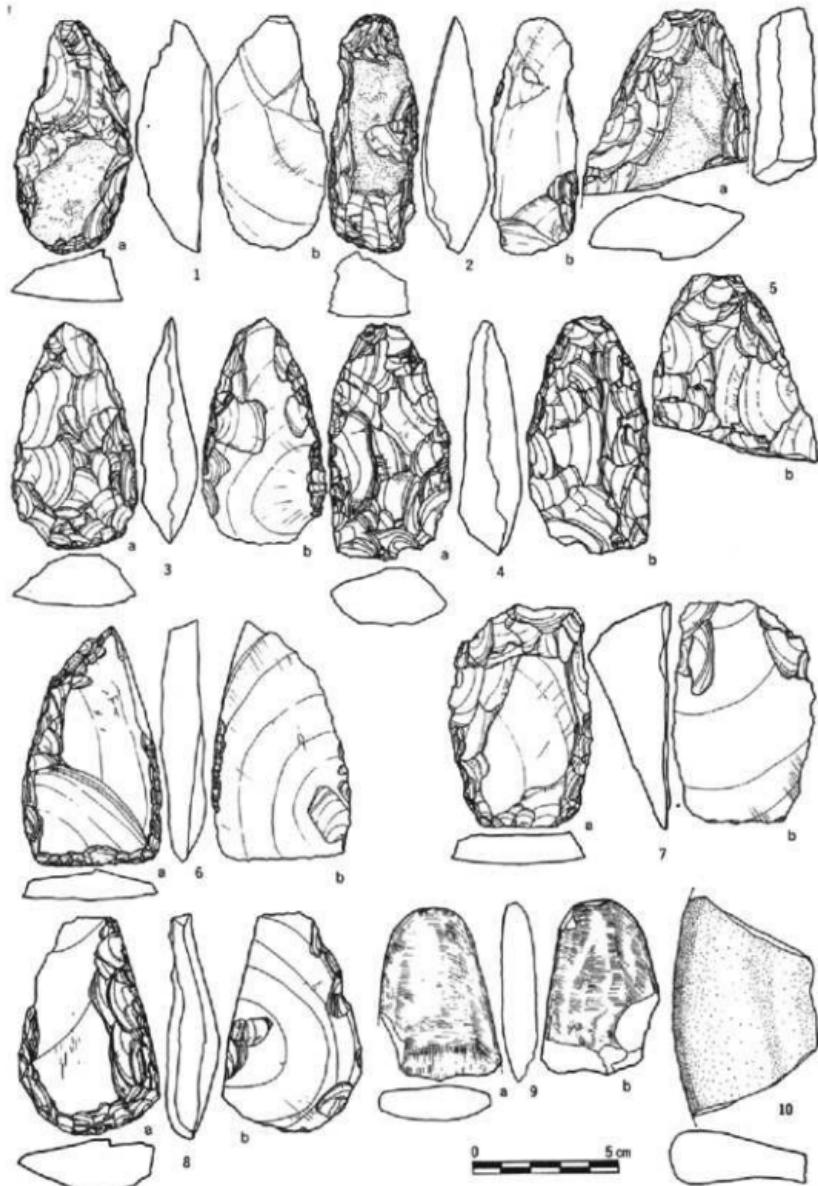
2点の出土がある。石鎌の未成品の可能性をもつが、石鎌に比べ大形で重い。

磨製石斧(第16図9 図版12上段)

小形の擦切手法による石斧で刃部は破損している。a面、b面とも製作時における無数の擦痕が観察され、その切り合いから刃部形成が最も新しいことがわかる。

磨 石(第16図10 図版12上段)

砂岩製で両面に擦面をもち、縁辺も磨かれて整形されている。石皿の可能性が高い。



第16図 石器実測図 (2)

IV まとめ

1 遺跡の性格について

本遺跡の調査によって、土壤8基・埋設土器1基・集石1基・ピット群を検出した。しかし、遺物の出土するほぼ全域の精査を行ったにもかかわらず、柱穴の可能性のあるピット群を検出したものの、明確な住居跡は確認できなかった。また、出土した遺物の分析から①その絶対量が少ない、②土器の所属時期は縄文時代早期中葉～前期末葉まで相当の長期間にわたる、③前期末葉～前期初頭の一時期を除けば、土器片の量も極めて少ない、④礫石器が極端に少なく、石器組成にかたよりがみられる、という結果を得た。以上の事実は、本遺跡における長期間の滞在を否定するものであり、定住を目的とした集落ではなく、一時的なキャンプサイトとしての性格をもつものと考えられる。

土壤8基のうち、SK3は早期中葉、SK4は前期初頭に埋没したと考えられるが、他は時期を特定できる遺物もなく、これらの性格を明らかにすることはできなかった。

集石は、その周辺から出土した遺物から、縄文時代早期末葉～前期初頭に構築されたものと思われ、①焼けていない、②付属施設はない、ことから、炉、墓の可能性は少なく、祭祀等、精神生活にかかわるものであることが予想される。

2 遺物について

本遺跡から出土した土器は、縄文時代早期中葉から前期中葉にかけての時期であり、とくに早期後半と前期初頭にかけてが最も多くみられる。土器の分布状況は、かなり広範にわたって各時期とも散在している。分類した土器の時期は次の通りである。

第I群土器については、a類ー1は平行な沈線を施し、口縁が外反しているため恐らく田戸下層式に相当し、a類ー2は貝殻条痕の痕跡がみられないが、貝殻腹縁の圧痕がみられることは、広義の意味で茅山式系に比定できる。b類とe類は、器面全体に原体SLRの斜状に縄文を施し、b類でやや太い原体、e類で細い原体を使用し、底部は丸底となる。d類は、口唇部が若干外反し、器面の表裏に斜状ないし羽状に縄文が施される特徴をもつ。これらb・d・e類は広義の上川名I式に相当し、庄内地方では遊佐町の金俣B遺跡に類例がある(註3)。c類は、器面全体に貝殻による条痕文が施され、それが裏面に及ぶものもある。土器の胎土に若干纖維が混入されるものもある。(第15図2)は、やや太く浅い平行沈線によって文様が描出され、器面裏側の全体に条痕が施され、纖維も混入されている。これらc類の時期は縄文時代早期末茅山上層式系に相当するとみられる。f類は(第15図1)に代表されるように、口縁部が平滑で外反し、底部が平底で張り出しがみられる縄文時代早期中葉の無文土器の一群で、県内では高畠町一ノ沢岩陰遺跡の第VI類土器やムジナ

岩岩陰遺物の第II類土器（註4）に相当し、近年では米沢市慶治清水B遺跡（註5）などでも出土している。

第II群土器は、a類で撚糸の圧痕が渦巻状あるいは平行に施されており、b類では平行な沈線によって区画され、その中は調整を受けている。c類は半截竹管による爪形や棒工具の刺突が施されている。（第15図3）や（図版11下）は、器形は丸底の深鉢と推定され、ループ文ないしは羽状繩文を地文とし、爪形や絹条体の押捺がみられ、単位文様としての構成がみとめられる。こうした単位文様を構成し丸底形を示す土器は、大石田町庚申町遺跡（註6）・村山市赤石遺跡（註7）で出土しており、庚申町遺跡では、口唇部に刻目が施され、口縁部に撚糸圧痕による麻状文が描出されるものと、羽状繩文で構成されるものがある。赤石遺跡の文様構成をみると、地文として羽状繩文を施し、口唇に刻目をもち、口唇直下には貼付けによる突帯がある。米沢市松原遺跡（註1）では、本遺跡でみられるa類土器が出土しているが、e類に伴う絹条体の押捺を施し爪形文と組み合せるものではなく、時間差として認められる可能性もあり、この点については今後の検討課題である。c類は、ヘラ状工具の先端を用いて、細線や綾杉状の文様を描出しており、繩文時代前期大木6b式に比定される。

このように本遺跡出土の土器は、断片的な資料であることは否めないが、この時期の資料が多いとは言えない現状を踏まえれば、繩文早期末～前期初頭の土器形式を再考するうえでの一資料として注目できるものと考えられる。

本遺跡から出土した石器は土器形式に見合う年代幅の中で製作・使用・廃棄されたもので、個々の所属する時期を特定することは困難である。また、仮に石器を遺したのが一時期に限られるとしても、礫石器が極端に少なく、組成のかたよりを認めざるを得ないであろう。このような現象は前述した、非定住という遺跡の性格に左右されるものと考えられるが、逆に、そこでみられる組成のかたよりは、その遺跡で行なわれた生産行為の多寡を反映するものとも考えられ、改めて遺跡の性格を浮き彫りにできる可能性もある。

このような観点から本遺跡の石器組成（卷末）をみると、笠状石器やスクレーパーといった動物に対する間接生産用具とみられる石器の比率が極端に高いことが指摘できる。

註1 幸 昭繁（1977）『松原』 優勝考古学会

註2 阿子島 香（1979）『折断調整石器』『神下聖山遺跡』七
飯町教育委員会

註3 佐藤慎宏他（1968）『庄内地方における考古学的研究』第
4報『研究集録第1号』 酒田中央
高校

註4 佐々木洋治（1971）『高畠町史 別巻 考古資料編』

註5 山形県教育委員会（1979）『清水北B・慶治清水B遺跡』

註6 中島 寛（1976）『大石田町庚申町遺跡について』『山
大史学』5号

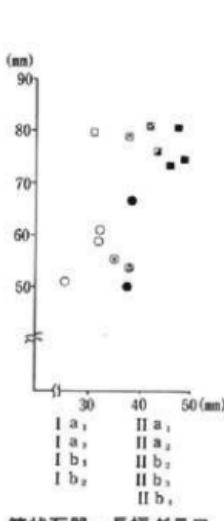
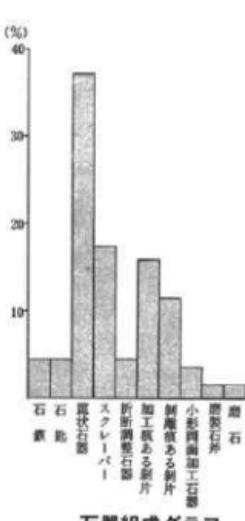
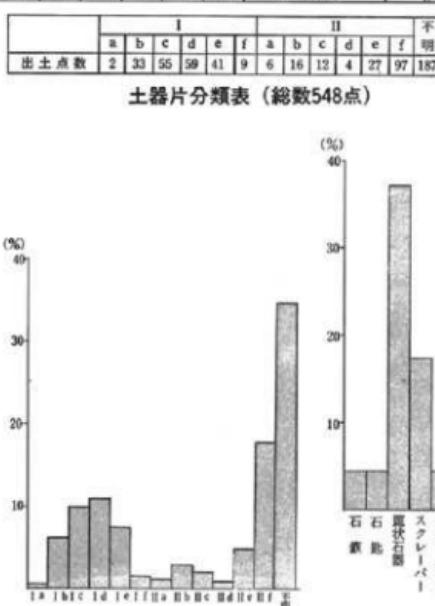
註7 山形県教育委員会（1981）『赤石遺跡・北原遺跡』

出土石器計測表

名 称	出土地	長さ	幅	厚	重量	目	備考	名 称	出土地	長さ	幅	厚	重量	目	備考		
石 砥	II - 36	23.5	36.3	4.4	1.8	切形		15.1	スラレーパー	7 - 18	(29.4)	(35.4)	(11.3)	7.37	I. 鋸、先端部削制	15-17	
石 砥	II - 14	(21.9)	15.4	3.6	(0.9)	先端部削制		15.2	スラレーパー	10 - 41	(18.5)	(25.4)	(10.9)	5.71	I. 鋸、先端部削制		
石 砥	II - 12	(13.9)	13.8	2.5	(0.5)	先端部削制		15.3	スラレーパー	9 - 38	38.9	38.5	8.4	6.07	I. 鋸、先形	15-18	
石 砥	II - 30	72.5	8.8	8.8	1.8	切形		15.4	スラレーパー	9 - 34	58.7	37.2	6.7	26.6	I. 鋸、先形		
石 砥	II - 26	(43.9)	25.1	8.6	(10.3)	先端部削制		15.5	スラレーパー	9 - 33	(33.7)	(20.8)	(6.7)	(5.7)	I. 鋸、先端部削制		
石 砥	II - 27	76.5	41.2	7.6	23.0	先形		15.6	スラレーパー	9 - 29	(21.8)	(38.3)	(12.9)	(12.1)	I. 鋸、先端部削制		
石 砥	II - 30	56.7	35.5	11.8	22.5	1.鋸、観光、風		15.7	スラレーパー	12 - 39	(31.4)	(35.8)	(12.9)	(13.3)	I. 鋸、先端部削制		
石 砥	II - 35	51.1	25.5	12.7	7.0	1.鋸、観光、風		15.8	スラレーパー	9 - 29	35.7	66.6	18.1	14.8	I. 鋸、先形	15-19	
石 砥	II - 39	46.5	33.3	14.6	28.5	1.鋸、観光、風		15.9	スラレーパー	9 - 30	32.6	32.9	11.7	19.9	I. 鋸、先形		
石 砥	II - 17	58.9	33.3	16.1	35.5	1.鋸、観光、風		16.0	スラレーパー	8 - 36	25.3	22.6	6.6	4.1	I. 鋸	15-20	
石 砥	II - 28	56.5	36.1	16.6	36.9	1.鋸、観光、風		16.1	スルメツルメツルメ	5 - 19	23.3	25.0	4.8	2.5	I. 鋸		
石 砥	II - 14	58.0	28.3	30.1	11.9	1.鋸、観光、風		16.2	スルメツルメツルメ	8 - 17	18.5	17.6	4.9	1.2	I. 鋸		
石 砥	II - 13	47.4	38.7	10.7	30.4	1.鋸、観光、風		16.3	加工ある鋸片	10 - 35	64.7	69.1	16.4	66.8	鍛打鋸片、左脚部削制		
石 砥	II - 29	78.9	38.1	24.1	66.7	1.鋸、観光、風		16.4	加工ある鋸片	8 - 17	(52.8)	(46.4)	(5.7)	(22.5)	鍛打鋸片、左脚部削制		
石 砥	II - 14	90.2	30.0	21.3	56.5	1.鋸、観光、風		16.5	加工ある鋸片	11 - 35	63.8	42.5	10.8	30.2	鍛打鋸片、右脚部削制		
石 砥	II - 17	76.6	43.9	17.6	66.3	1.鋸、観光、風		16.6	加工ある鋸片	10 - 14	(50.4)	(41.3)	(16.2)	(34.5)	鍛打鋸片、右脚部削制		
石 砥	II - 27	80.3	40.9	18.7	63.1	1.鋸、観光、風		16.7	加工ある鋸片	9 - 28	43.4	33.8	7.6	7.3	鍛打鋸片、右脚部削制		
石 砥	II - 15	81.2	42.5	22.1	58.8	1.鋸、観光、風		16.8	加工ある鋸片	8 - 15	25.5	38.9	9.9	7.9	鍛打鋸片、右脚部削制		
石 砥	II - 16	76.2	46.3	26.1	53.2	1.鋸、観光、風		16.9	加工ある鋸片	8 - 25	45.7	81.6	15.7	33	鍛打鋸片、右脚部削制		
石 砥	II - 18	74.8	45.7	14.5	44.4	1.鋸、観光、風		17.0	加工ある鋸片	10 - 22	64.3	32.5	9.4	15.2	鍛打鋸片、右脚部削制		
石 砥	II - 16	(65.6)	(35.4)	(21.4)	(41.4)	1.鋸、観光、風		17.1	加工ある鋸片	10 - 36	34.3	22.5	9.4	7.7	鍛打鋸片、右脚部削制		
石 砥	II - 25	48.4	32.5	17.4	54.5	1.鋸、観光、風		17.2	加工ある鋸片	13 - 29	(48.4)	(38.2)	(14.6)	(20.4)	鍛打鋸片		
石 砥	II - 31	60.3	33.7	19.4	36.5	1.鋸、観光、風		17.3	加工ある鋸片	8 - 10	(14.1)	(37.7)	(9.5)	(3.2)	鍛打鋸片		
石 砥	II - 29	80.9	32.8	18.3	47.3	1.鋸、観光、風		17.4	加工ある鋸片	8 - 20	31.4	31.2	14.6	28.8	鍛打鋸片、左脚部削制		
石 砥	II - 16	(54.4)	(31.8)	(19.8)	(37.7)	1.鋸、観光、風		17.5	加工ある鋸片	9 - 14	27.1	23.8	5.5	4.1	鍛打鋸片、左脚部削制		
石 砥	II - 26	60.2	29.2	27.2	37.7	1.鋸、観光、風		17.6	加工ある鋸片	8 - 25	(39.4)	(21.2)	(5.2)	(2.1)	鍛打鋸片、左脚部削制		
石 砥	II - 16	(66.4)	(27.8)	(16.5)	(32.1)	1.鋸、観光、風		17.7	加工ある鋸片	9 - 20	32.1	23.7	4.6	3.1	鍛打鋸片、左脚部削制		
石 砥	II - 14	(55.6)	(30.6)	(16.5)	(32.5)	1.鋸、観光、風		17.8	加工ある鋸片	8 - 35	38.0	43.0	8.8	9.5	鍛打鋸片、右脚部削制		
石 砥	II - 13	(61.6)	(54.2)	(29.6)	(46.7)	1.鋸、観光、風		17.9	加工ある鋸片	9 - 35	31.7	14.8	5.8	2.7	鍛打鋸片、右脚部削制		
石 砥	II - 7	(52.7)	(57.9)	(13.6)	(27.0)	1.鋸、観光、風		18.0	加工ある鋸片	9 - 14	(32.9)	(26.6)	(5.2)	(5.0)	鍛打鋸片、右脚部削制		
石 砥	II - 18	(25.8)	(38.6)	(6.8)	(7.0)	先端部削制、片面加工		18.1	加工ある鋸片	10 - 14	30.5	36.9	8.4	7.8	鍛打鋸片、右脚部削制		
石 砥	II - 17	(14.5)	(35.1)	(5.3)	(7.0)	先端部削制、片面加工		18.2	小形奥曲面加工石	9 - 32	36.3	22.5	8.9	6.8	先形、圓錐とも全体に加工及び	15-4	
スクリーパー		9 - 34	64.3	32.7	18.5	20.8	I. 横彫り形		15-16	小形奥曲面加工石	9 - 21	28.5	22.4	6.4	3.7	先形、圓錐とも周辺加工	
スクリーパー	II - 29	(12.6)	(19.5)	(12.8)	(1.0)	1.鋸、米字形に削制				新 石 器	8 - 26	(58.6)	(28.3)	(11.3)	(39.2)	基準彫刻、先端部削制	16-9
スクリーパー	II - 14	(30.6)	(21.1)	(7.5)	(1.0)	1.鋸、米字形に削制				新 石 器	7 - 19	(73.1)	(48.6)	(17.5)	(56.9)	周辺削制に彫り、一部削制	16-10

土器片分類表(総数548点)

石器分類表(総数402点)



図版 1

発掘前中央区全景



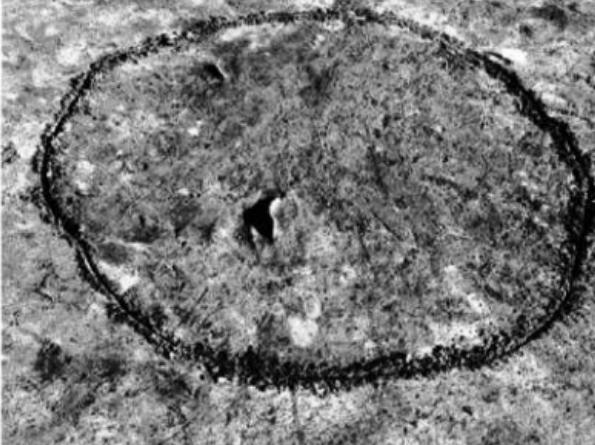
調査風景



R P 1 出土状況



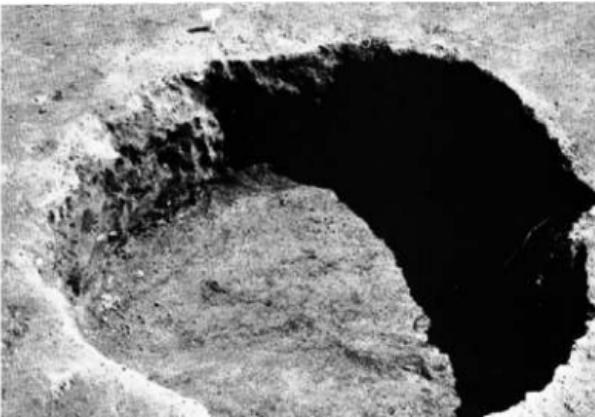
図版 2



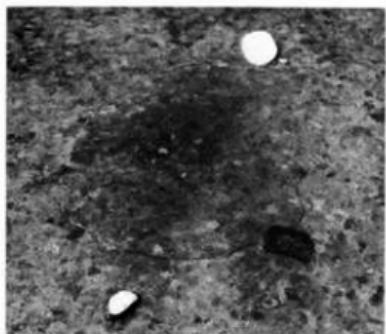
SK 3 確認状況



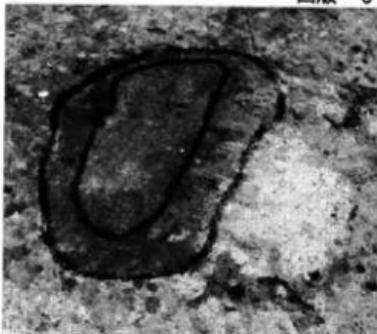
SK 3 層位断面



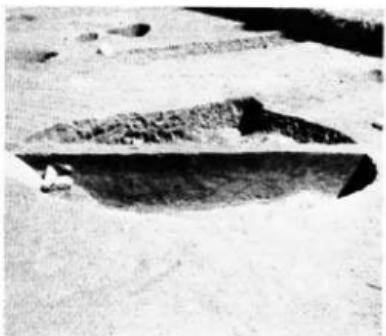
SK 3 完掘状況



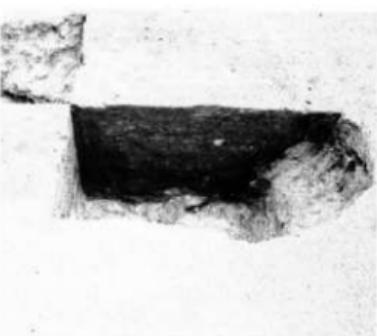
SK 8 確認状況



SK 7 確認状況



SK 8 層位断面



SK 7 層位断面



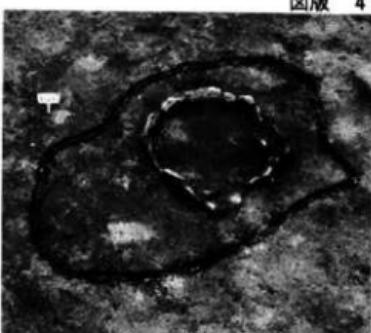
SK 8 完掘状況



SK 7 完掘状況



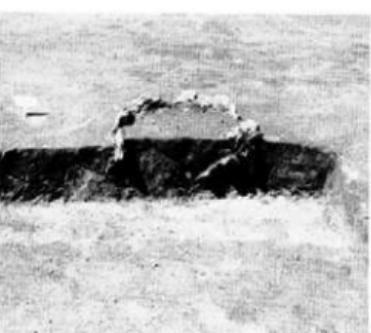
SK 6・9 確認状況



EU 5 確認状況



SK 6 層位断面



EU 5 層位断面



SK 9 層位断面



EU 5 土器内部覆土除去

図版 5



SM10 検出状況 東より



SM10 検出状況 南より



SM10 小礫除去 東より

図版 6



中央部南部遺構群 南より



中央区南部西半 土壙群 東より

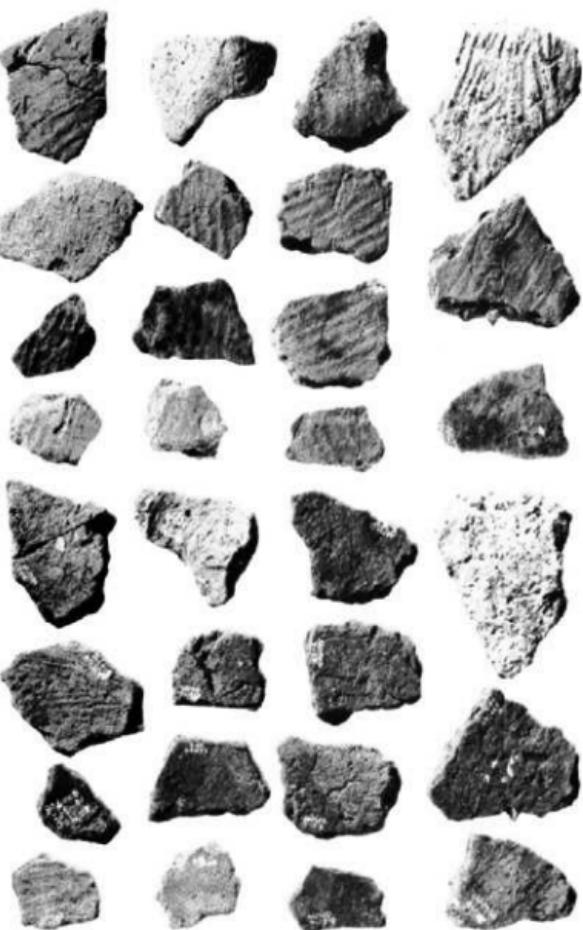


中央区南部中央 ピット群 東より

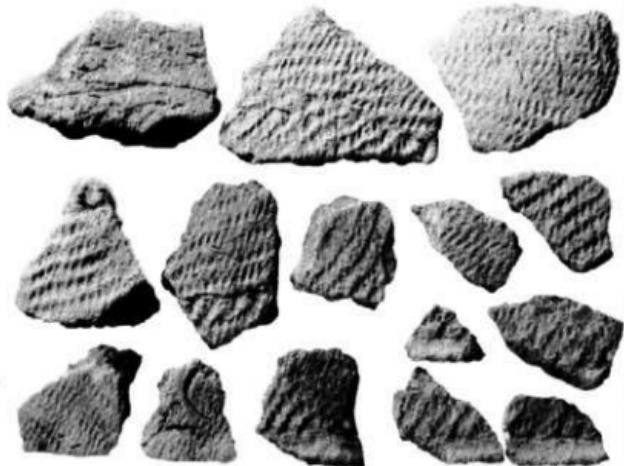
第Ⅰ群土器 a類・1類



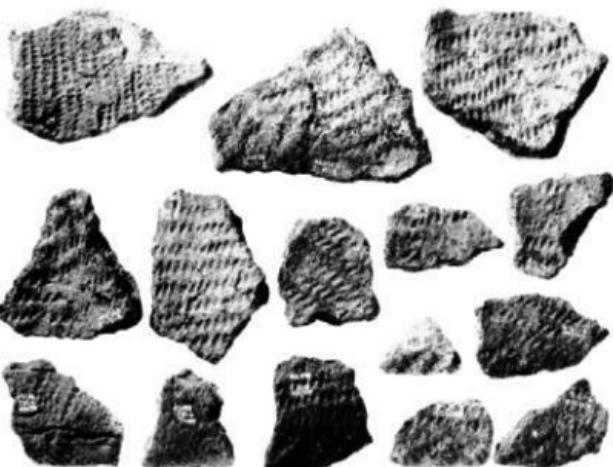
第Ⅰ群土器 c類才モテ



同上ウラ

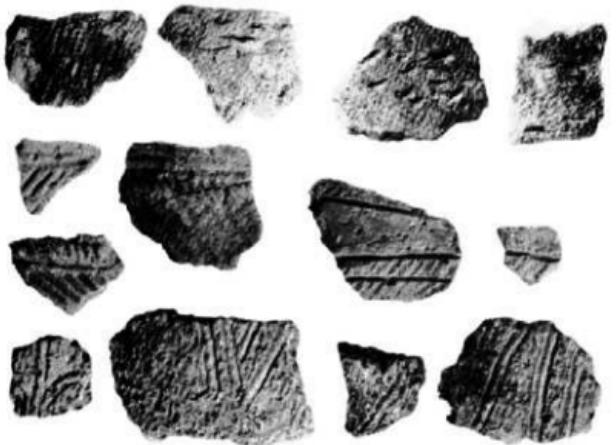


第Ⅰ群土器 d類才モテ



同上ウラ

第Ⅰ群土器 b類



第Ⅱ群土器 a類・b類



第II群土器
a類・c類・d類



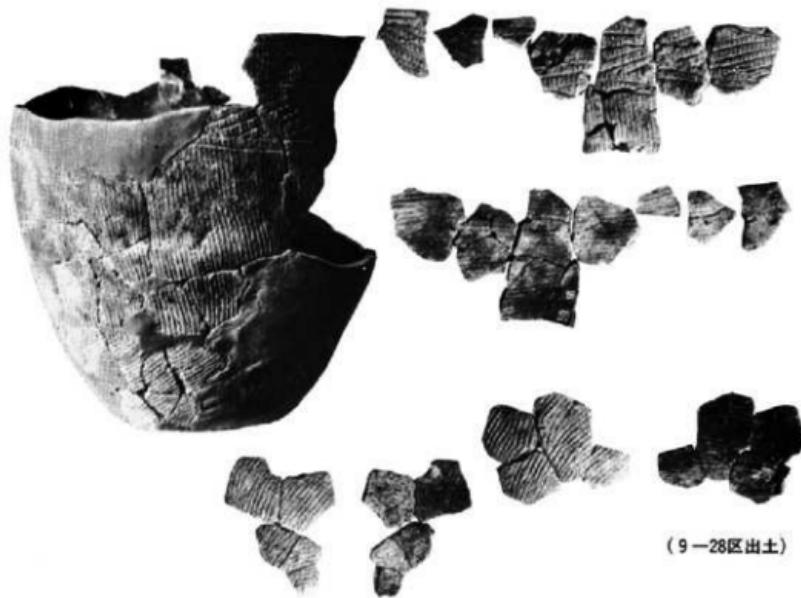
第II群土器 e類



第II群土器 f類

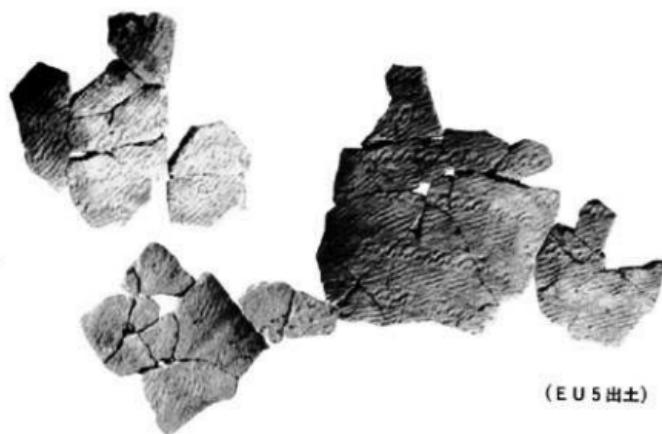


(SK3出土)



(9-28区出土)

完形・一括土器（1）



(EU5出土)



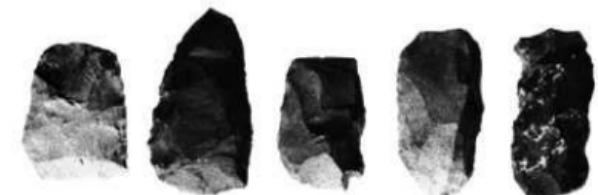
(6~7-18~19区出土)

兜形・一括土器(2)

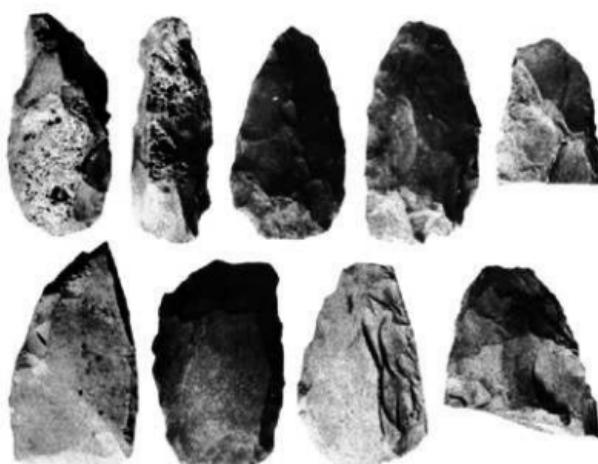
石器（1）
石鎌・石匙・磨製石斧他



石器（2）
錐状石器 I 類



石器（3）
錐状石器 II 類



山形県埋蔵文化財調査報告書第42集

おお ぶち だい
大淵台遺跡

発掘調査報告書

昭和 56 年 3 月 25 日 印刷

昭和 56 年 3 月 31 日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷
